

小澤 寛樹

今回は山崎豊子原作の邦画「沈まぬ太陽」を取り上げます。1985年に起きた日航ジャンボ機墜落事故をモデルに、航空会社に勤める二人の男性の対峙的な人生が描かれています。

### 単身赴任の心の葛藤を描いた

### 「沈まぬ太陽」(2009)

世コースをまい進し、映画では前半、左遷された恩地の姿を描いています。ここで目を引くのがテヘラン以降、単身赴任となった恩地の行動です。ナイロビに赴任中、日本の頃から、恩地のことで学校でいじめられ孤立していると悲痛な内容の手紙が届きます。すると恩地はサブナへ車を走らせ、大型動物のハンティングに没頭します。地平線のかなたに落ち行く夕日をじっと見つめる彼の目からは一筋の涙が

流れます。単身赴任の人はメンタル的に不安定な状態に陥りやすく、その原因の多くはやはり家族がそばにいないことにあります。家族は自分

が悩む時、また逆に喜び湧き立つ時にそれを受け止めて落ち着かせてくれる、セーフティネットの機能を

持つものです。先の恩地の行動は、理不尽な会社の仕打ちに對して「怒り」の感情を自分の中で大きく裂かせ、その矛先をハンティング

に向けてと見ることが出来ます。普段の恩地なら使うとは思えないライフルは、実は彼に内在する攻撃的な衝動を巧みに象徴していたわけです。

映画では明確ではありませんが、怒りの処理でいわゆる「飲む(アルコール依存)、打つ、買う」の行動が生じ、不適応を起こす人がいます。現代日本のサラリーマンにとつて、組織に所属することから生じる怒りの感情をいかに処理、制御するかは非常に現実的な課題でしょう。

この映画でも社内での地位、立場の違いによる複雑な人間模様に至る所に現れます。そこで顕在化するのう自らの一面に気づかされます。人間の歴史で繰り返されてきた戦争・闘争は、人の、恐らくは多くの男性の持つ攻撃性を徹底的に吐き出し、人類社会が次のブ



恩地はかつての右腕・行天から圧力を受ける (イラスト：嶋田真子)

# 内面の攻撃性の処理課題

長崎大精神神経科学教室のホームページのアドレスは <http://www.medic.nagasaki-u.ac.jp/psychtry/>